

<全体分析>

試験時間 75分

解答形式

計算・記述が中心で、空欄補充・論述などが含まれる。

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)

難易 (易化・やや易化・**変化なし**・やや難化・難化)

出題の特徴

字数指定の論述問題が9問から2問へと大幅に減少した。計算問題については、計算過程を記述される形式の問題が増加した。また、具体的な数値を求めるものが多くなり、答えを導き出すのに煩雑な計算が必要であった。

大間によって分量や難易度の違いが大きかった。問題Ⅱの固体地球分野と問題Ⅳの宇宙分野の分量が多く、問題Ⅲの大气・海洋分野の分量が少なかった。

その他トピックス (入試改革の方向性を踏まえた目新しい出題など)

前問の解答と連動する形式の問題が増加した。

入試改革の方向性を踏まえた出題はなかった。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	記号選択 記述 論述	岩石・地質 (地質断面図)	地学 基礎 + 地学	問1・問2 2つの地質断面図から走向と傾斜の方向を考える問題で、地層の立体的な分布のイメージができないと解くことが難しいが、モデルが単純であることから、標準的なレベルである。 問3 代表的な示準化石と地質時代の出来事を結びつけるやや易しい知識問題である。 問4 不整合の形成過程を論述する標準的な問題である。	やや易
II	空欄補充 計算	固体地球 (地球の内部)	地学 基礎 + 地学	問1 地球内部構造に関する易しい知識問題である。 問2 (1) 緯度の差と子午線弧長の長さから地球の半径を求めるよく出題される形式の計算問題である。 (2) 単振り子の周期と万有引力の求める公式を覚えていないと解くことができず、これらの公式を組合せて地球の質量の具体的な数値を求める問題で、煩雑な計算も必要となるため、難しい。 問3 マントルの体積を計算して密度からその質量を求め、問2 (2) の結果を踏まえて核の質量を求めていく問題で、解答に時間を要する難しい問題である。	やや難

III	空欄補充 計算 論述	大気と海洋 (水循環とエル ニーニョ現象)	地学 基礎 + 地学	問1 大気とエルニーニョ現象に関する易しい知識 問題である。 問2 大気中の水の平均滞留時間を求める計算問題 である。 問3 エルニーニョ現象発生時の大気と海洋の状態 を論述する標準的な問題である。	標準
IV	記述 計算	宇宙 (連星)	地学	問1 グラフから連星の速度や公転周期を読み取る 問題である。この問いを間違えると、その後の問 題すべてに影響が出る。 問2 連星の公転半径を求める計算問題で、単位換 算に注意が必要である。 問3 ケプラーの第三法則から連星の質量和を求め る標準的な計算問題である。 問4 連星のそれぞれの質量を求める標準的な計算 問題である。	やや難

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

教科書の内容に沿った出題ではあるが、地学基礎の知識のみで解答できる問題は非常に少ないため、地学の教科書を中心に学習することが望まれる。論述対策としては、重要な地学用語や原理を十分に理解して、50～100字程度で素早く的確にまとめる方法を身につけることが大切である。

計算問題の対策としては、重要な公式をしっかりと覚えて運用できるように演習を重ねよう。また、計算過程は、その意図が出題者に伝わるように心がけよう。

考察問題の対策として、教科書などに掲載されている様々な図の読み取りが重要である。また、実習・観察に関しては、自分で計算をしたり、グラフを作成したりするなどの作業を行うことが重要である。

地学は問題集が少ないため、過去のセンター試験や二次試験などに目を通しておくとよい。名大入試オープンや記述模試なども活用して学習していこう。